

復刻版

# 現代建築

# 愚作論

彰国社

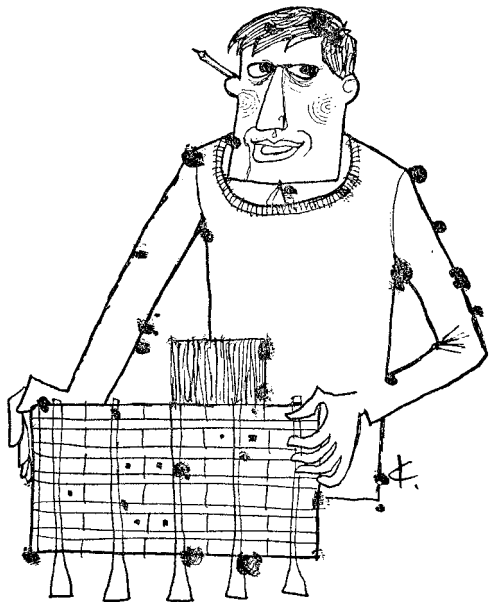
八田利也 著

第一章	現代建築家気質……………	7
	—— 乱世における建築家の哲学 ——	
第二章	小住宅ばんざい……………	17
第三章	「ばんざい」始末記……………	47
第四章	都市住居の未来像……………	71
第五章	都市の混乱を助長し破局に到るを待て……………	83
	—— 大凶篇 ——	
第六章	都市再開発は建築家に市場を与えるか……………	107
第七章	都市のアミニティを確保するために……………	139
第八章	近代愚作論……………	159
第九章	巨匠への道……………	193
	—— 八田利也の哲学 ——	
《補》	八田利也論……………	209
	—— 建築界妖怪伝のうち ——	
	川添登……………	209
解説	「量」から「アーキテクチャ」へ……………	225
	藤村龍至……………	225

八田利也著  
彰国社刊

第一章 現代建築家気質

—— 乱世における建築家の哲学 ——



△乱世のマスコミのなかで主体性を確保する道は、匿名にして有名であり、責任あるがごとくして責任をとらないことである▽

彼の意見は、根っから建築家的である。彼が建築家である以上、その発想法が建築家的であることは当然なことである。だから彼は伝統にたいしても、都市にたいしても、市民にたいしても、そして施主にたいしても建築家本位に考える。それはいいことであるとか、わるいことであるとかいうことではなくして、単に生理的な現象にすぎない。

### 伝統は利用価値によって評価される

伝統というものは、そのなかから何かひきだすことができるとしたら、それはそれで十分利用

価値のあるものなのである。彼にとっては伝統とは、すぎ去った建築をなるべく歩留りよく利用しようとする態度と精神とにはかならない。この意味で過去の建築の価値は彼に与える影響の大ききによってきまる。かの有名な大僧正が関係したとか、絶大な権力をふるった院のミカドの御願によるものだとか、高名の建築家の設計したものだとかいうことは関係はない。古建築の建築史的価値というものはおよそ彼とは無縁なものなのである。

### 実感は勅語にひとしい

たとえば日光東照宮をとりあげるとしよう。東照宮の諸建築、わけても大猷院の建物は霊枢車の元祖として歴史的価値のあるものであり、あの伽藍配置は建設の大棟梁甲良豊前守が二三歳の年、大和・伊勢へ旅した折に女人高野・室生寺に詣でた際すでに思いついていたものである——これがたとえ彼の実感のひとつだとしても——ここにはたしかにさもありませんと思わせるようなものがある。そこでこの解釈を建築史家が詳細な分析のもとにまちがいでであると断定したら、それは建築史家の方がまちがっていて、彼——建築家の方が正しいのである。なぜなら建築家は天皇であり、天皇のいうことはその理非曲直の如何にもかわらず、その蓄積の末にはなたれた実感

は常に正しいからである。だから建築家にとっては、自らが他人に対し建築家として頭をさげることがありえない。なお念のためにいっておくけれど、彼は建築史家が自らを天皇であると主張することを拒否しない。

### 都市計画はあなたまかせ

また都市という怪物がどう発展するかは彼の知ったことではない。一〇年先の都市の姿を知らないということにためらうべきではない。どだい未来の都市における全体像などは、彼の発想法のなかには存在しないのである。

さまざまの人たちが、未来都市のプロジェクトを展開する。都市計画家たちはこのプロジェクトを見て、いかにそれがアウトなものであり、きびしい現実に目をそむけたイメージ・ゴーイングないい気なものであるかを、数字をもって指摘するだろう。これらのプロジェクトはどう考えてもこれからの都市計画の基本的な哲学となりうるものではない——としよう。

しかし彼は建築家だから、都市計画家たちとは別の発想の仕方をする。すなわち彼はこの荒唐無稽なプロジェクトの存在価値をみとめる。なぜならかかるスケールのプロジェクトこそ建築に

おけるオリジナリテイの根源だからである。したがって彼らの未来都市は、都市の現実と将来にたいして役立つのではなくて、デザインのトレーニングに役立つにすぎないのであるとみなす。折衷主義建築時代にオーダーのトレーニングが設計の基本的要素であったように、現代建築におけるトレーニングの一種は都市的な建築プロジェクトなのである。

とにかく彼にとっては一〇年先の都市がどのように発展しようと、そこで市民がどう生活しようとして、それは建築家の責任ではないのである。彼は都市計画にたいしては「あなたまかせ」である。彼がそんなところにまで責任を感じることは僭越というものである。いまだかつて彼はそれほど大きな責任をとらなければならぬほど権力も地位もかちえたことはない。また彼がそれほどの責任をもって仕事をする機会をもったことはないし、今後もありえない。何よりも彼は都市計画とアーバン・デザインとを区別する。

しかしもっと重要なことは、そういう精神状態からは、設計はできないということである。彼に必要なのは装置か単純なメカニズムだけなのである。真宗のさる高名な上人が「南無阿弥陀仏」といえば衆生は救われると云って人々をひきつけたように、彼に必要なのは都市の未来にたいする詳細な分析とか都市存在の技術手段に関する知識ではなくして、南無阿弥陀仏に相当する哲学Ⅱ装置だけである。これこそまさに都市計画における建築に値する。

### 市民よりも自らを信ずる

彼にとつては市民は無知の輩である。それは市民にたいする侮辱でもなく、彼が高慢だという証拠でもない。ましてや彼が反動だということにはならない。むしろ現実をまじめに分析したまじめな結論にはかならない。現代社会をつらつら分析すれば、市民は無知なものなのである。

だから彼は市民にたいして語りかける言葉はむづかしい方がよい。言葉はわかりにくいほど市民は彼にアカデミックな権威を感じる。だからわかりやすい言葉というものは所詮空しいものである。彼が市民に答える道は、彼らのために代弁したり、彼らの意欲を高く評価したり、彼らの美德や悪徳を利用したり、彼らを宣伝することではない。彼は実際の作品でもって答えるだけである。彼が建築家である以上、作品以外に市民と交渉する場はない。

設計または作品以外のところで、もし市民が登場してくるとすれば、それは他人を説得するプロセスのなかである。正直な人は、市民に適当に利用されているにすぎないと考えるむきもあるが、それは事実であっても真実ではない。所詮彼と市民とは無縁の輩である。人民の社会になっても、彼が事実において接するのは人民ではない。組織あるなかでは市民の意向は彼に直結しない。古代ローマ時代の公衆ならともかくも、現代市民の意向はさまざまなフィルター——マスコミ、官僚組織、ボス——を通してはじめて彼の耳に達する。彼は疑い深い。フィルターの向う

側を信ずるよりは、一人の市民として自らの権威と善意とを信じた方がたしかだと彼は感じている。

この意味では彼はごうまんであるから市民を無視するのではなくして、市民にはそれぞれのプロフェッションがあり、建築家というのもひとつのプロフェッションであり、プロフェッションというものはお互いに尊重しなければならないものであり、そうしなければ責任というものはうまれないからである。だから彼は建築家にふさわしからぬほど冷徹な凝視力があり、市民を尊敬し、分化を通して社会発展に寄与しようとするから市民を眼中におかないのである。

### 施主は頑迷不遜である

そして建築家にもつとも関係ふかい施主を彼はどうみるだろうか。彼にしたがえば施主は常に頑迷不遜なのである。だから彼は施主をうまくいくるめ、だまくらかして、金を沢山ふんだくり、思いのまま設計しようと努力する。こういう心がけを怪しからんという方もあろうが、それは当たらない。口にごささないが、そう考えている建築家は数多い。もちろん私は、施主は人民の一人として尊重しなければと考えている建築家の存在していることを否定しない。しかしえて

して、施主は頑迷不遜だと考えている連中の作品の方が立派なことが多いから不思議である。結果としてこれは施主にとつても好都合である。このような図々しさと厚かましさがそのままに、彼のほとぼしりである造型意欲の反映であり、同時に自らの職分に忠実なる証拠でもある。

乱世においては東洋的謙虚さは自らの無能を白状しているものにほかならない。もし自らに才能があり、自らの可能性を信ずる者にとつては、人間のエイチと効果ある努力を無にしないことは人類社会における義務のひとつである。だからもしそのため図々しく厚かましくなったとしても甚だけっこうなことだとみなさざるをえない。

論文掲載誌

第一章 現代建築家気質……………	近代建築	一九六〇・六月号
第二章 小住宅ばんざい……………	建築文化	一九五八・一三八号
第三章 「ばんざい」始末記……………	建築文化	一九五八・一四三号
第五章 都市の混乱を助長し破局に到るを待て……………	建築文化	一九五九・一五一号
第六章 都市再開発は建築家に市場を与えるか……………	建築文化	一九五八・一四〇号
第七章 都市のアメニティを確保するために……………	都市問題	一九六〇・九月号
第八章 近代愚作論……………	建築文化	一九六〇・一六五号
第四章・第九章・ <small>△補</small> 章……………		新稿

解説 「量」から「アーキテクチャ」へ

藤村龍至



## 「量」が求められた時代の建築家像

本書を通読してみると、基本的に解説など不要であると思えてしまう。なぜなら、時代背景が異なるはずなのに、建築家を取り巻く問題が一九六一年当時と二〇一一年現在であまりにも似過ぎていて、そのまま読んで十分に説得力があり、しかも参考になるからである。

本書で何が問題にされているのかというと、「建築家の職能論」である。「小住宅ばんざい」は住宅設計、「都市の混乱を助長し破局を待てる」は都市設計、「近代愚作論」は作家論と、複数のトピックにまたがっているように見えるが、基本的には「状況が変化するなかで建築家の職能はどのように変化するか」という問題を繰り返し論じている。そのような建築家の、建築家による、建築家のための書籍なので、建築関係者以外の人が読んでもピンとこないが、建築関係者が読めば、胸がすいて膝を打つか、カチンと来て猛然と反論をしたくなる、それほどまでにリアリティがあり、建前というよりは本音のブラクティカルな分析を行っている。

「建築家の職能の変化」とは具体的にいえば、個人住宅の大量生産と建築物の巨大化をめぐる変化である。本書の前半部分では「小住宅」が前衛的であったひとつの時代が終わり、職能の分裂が起きつつあることを指摘した上で、建築家にスタンスの判断を迫っている。後半部分では

ニュータウンや都市再開発など、都市に巨大さを伴った新しい現実が生じていることを指摘した上で、それを建築家の新しいフィールドとせよ、と述べている。そして最後に建築家の新しい表現のあり方として「愚作」を積み上げた上で「傑作」を残す新たな作家性を実践せよ、と提案している。

要するに本書は、住宅設計、都市設計、作家論を通じて、建築家は「量」を問題にせよと提案している。そうすれば建築家は社会の主流となることができる、とエールを送るのである。一九六一年、終戦から一六年の当時、川添登氏の「補」によれば「日本経済は相対的安定期」に入り「大都会に大衆社会的状況といわれるムードの支配する消費文化の華が咲いた」という。そのような社会背景があるにもかかわらず、建築家の言説が「量」を捉えておらず社会と乖離していることに、八田は苛立っていたのである。

## デラックス型とマスプロ型の対比が全面化した現代

一九七〇年代に入り、都市はさらに拡大を続け、五〇階を超える超高層ビルや四千人収容のホールなど、前例のない巨大建築物が次々と建設されるようになってくると、クライアントは設計者

に技術的な蓄積を要請し、組織的な設計事務所が台頭し、個人名を冠したアトリエ型の設計事務所とは異なる発展を遂げることとなる。

そのような状況が徐々に顕在化しつつあった一九七四年九月、建築史の研究者で批評家の神代雄一郎は『新建築』誌上にて「巨大建築に抗議する」という論文を発表する。新宿西口の三井ビル（設計Ⅱ日本設計）やNHKホール（設計Ⅱ日建設計）などの巨大建築を、設計事務所が自らの経営のために商業主義に無批判に追従した結果、人間的なスケールを失った虚しい建築を量産していると批判した。比較対象として同時期に竣工した東京海上ビル（設計Ⅱ前川國男）を挙げると、建築界全体に問いかける内容を含んでいたこともあり、大きな反響を呼び、日本設計の池田武邦、建築史家の村松貞次郎による反論、神代による再反論などが『新建築』誌上に継続的に掲載され、「巨大建築論争」と呼ばれる論争に発展した。

この論争において最も目立った言説のひとつは、日建設計に所属する林昌二の論考「その社会が建築を創る」である。「パレスサイドビル」（一九六六）、「ポララ五反田ビル」（一九七二）が評価を得て、組織に所属しつつも個人名での発言が目立っていた当時の林は、クライアントを含む社会全体が巨大性を要請するのであって、設計者のみがその責任を問われることは建築家の能力を大きく見積もり過ぎであり、「ひいきの引き倒し」であると反論した。本書の著者、八田利也の構成員のひとりである磯崎新のちに、この時の林の聞き直ったかのように聞こえる主張

が、日建設計のみならず組織型設計事務所なる匿名型の設計事務所のイデオロギーとして固定化され、アトリエ型の建築家と役割を棲み分けるきっかけとなったと分析する。

もっとも、多方面から一斉に反論が噴出した背景として、神代の「前川Ⅱ良識ある戦前派、日本設計Ⅱ商業主義に飲まれた戦後派」という紋切り型の世代論があり、さらに神代の指摘には三井ビルの養生シートを仕上げと勘違いするという事実誤認があったのだが、結果としてそれ以後の神代は批評家としての活動を引退し、建築界ではこの「事件」以降、巨大建築の是非が問われることもなくなった。

磯崎はその後、事務所名に「アトリエ」を冠し、やがて「都市からの撤退」を宣言するようになる。このようにして一九七〇年代に入る頃には設計事務所はアトリエ型と組織型に分裂し、それぞれ役割が模索されていった。このアトリエと組織に所属する建築家の対立のほか、設計事務所とゼネコンに所属する建築家の対立（いわゆる専兼問題）など、建築家の職能をめぐる争いは、一九七〇年代から八〇年代にかけて様々な議論があったが、やがてバブル経済による狂乱がそれらをかき消し、その崩壊を経て、グローバルバリエーションと情報化の進んだ一九九〇年代後半にはその棲み分けは決定的なものとなる。今日では「東京ミッドタウン」（二〇〇七）のような巨大かつ国際的なプロジェクトでは、ファサードとインテリアなど目に見える部分を外国人を含むアトリエ型の有名な建築家に依頼し、ヴォリュームや構造など、目に見えない部分を国内の大規模な

「量」から「アーキテクチャ」へ